提　言

メーリングリストを活用した教育改善の支援
－5分間ファカルティ・ディベロップメント－

中島　平[1)*]，渡利夏子[2)]

1）東北大学大学院教育情報学研究部，2）東北大学高等教育開発推進センター

1．はじめに

新しい教育改善の支援活動の一つとして，メーリングリストを活用することを提言する．これまで，日本における教員支援活動，特にファカルティ・ディベロップメント（以下，FDとする）と言うと，教員にとっては，およそ以下のようなイメージがあったように思う．すなわち，忙しい中で誰かに指名されて，一箇所に集められて，仕方なく講演を聞くというようなものである．一方でFDの主催者にとっても，このような形態のFDは，出席者の確認，会場の確保，講演の依頼など，多くの負担がある．本稿の執筆動機は，大学教員とFDの推進者双方にとって，より負担の少ない教育改善支援活動の一例を紹介し，教育改善支援活動の幅と選択肢を増やしたいと考えたことである．

メーリングリストは，教員が忙しい時間の合間に，部屋で座ったままで情報を受け取れるメディアである．また，FDの推進側にとっても，まとまった時間を使わずに執筆した内容を，多数の読者に，コストをかけずに発信することができる．このため，FDのメーリングリストを適切に運用することができれば，FDの推進者とFDを受ける教員は，お互い，少ない労力で恩恵を受けられる可能性がある．現に米国では2万人以上の登録者を持つ教育改善支援のメーリングリストが存在し，今も成長を続けている[1)]．FDの組織を持てない英語圏の大学の中には，教員にこのFDメーリングリストを紹介している大学もある．本稿ではまず，このように米国で成功しているFDメーリングリストの例を紹介する．

紹介する米国のメーリングリストとは独立に，我々も教育改善支援のためのメーリングリストを運営している．本稿では我々が運営するメーリングリストを詳細に紹介する．そして，米国のメーリングリストと我々のメーリングリストを比較することで，双方のFDメーリングリストに共通した特性を導き出す．それを基に主にFDの推進者対象として，メーリングリストを利用した教育改善の支援活動の提言を行う．

本稿の構成を以下に示す．まず第2章で，メーリングリストを利用したFDの成功例として，米国スタンフォード大学のRichard M. Reis教授によって創設された「Tomorrow's Professor Mailing List」[2)]を紹介し，その目的，方法，読者層，そして，影響と人気の理由を明らかにする．次に第3章で，我々が参加しているプロジェクト内で実践しているメーリングリスト「プロジェクト通信」について述べる．具体的には，まず「プロジェクト通信」の基本方針を述べる．次に「プロジェクト通信」成立の背景として，プロジェクトの概要を簡単に説明し，「プロジェクト通信」の読者の分析を行う．続いて，「プロジェクト通信」の目的と方法を述べる．その後，実際に「プロジェクト通信」で配信されたメールを一例として引用し，読者へ配慮がどのように具体的に反映されているのかを解説する．第4章では，「プロジェクト通信」と「Tomorrow's Professor Mailing List」とを比較し，その類似点と相違点とを列挙し，考察する．第5章は結論であり，実際にFDの推進者が教育支援にメーリングリストを活用する際の提言を行う．

*）連絡先：980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1　東北大学大学院教育情報学研究部

2. Tomorrow's Professor Mailing List

「Tomorrow's Professor Mailing List」は，別名，「Desktop faculty development, one hundred times per year」と呼ばれ，米国スタンフォード大学の Richard M. Reis 教授によって，1998年の3月に創設されたメーリングリストである．本章では米国において成功しているFDのメーリングリストの例として，このメーリングリストを取り上げ，メーリングリストの目的，内容，メカニズム，読者，影響力と人気の理由についてそれぞれ述べる．

2．1．「Tomorrow's Professor Mailing List」の目的と内容

「Tomorrow's Professor Mailing List」は，以下の2つの目的を掲げている．

1．今日的な高等教育のトピックや問題に関する，刺激的かつ実用的な資料・題材の提供
2．学術機関の教育，研究，サービスに対して，読者がどのように準備し，仕事を見つけ，そして成功するかの見識を提供

そして，この目的を達成するために，以下の5種類のテーマを定め，全ての記事をそれらのテーマに分類している．

（1）将来の高等学術機関（Tomorrow's Academy）
　記事例：高等教育における3つの革命
（2）将来の大学院生とポスドク（Tomorrow's Graduate Students and Postdocs）
　記事例：アカデミックな仕事の申し出への一般的な回答法
（3）将来のアカデミックキャリア（Tomorrow's Academic Careers）
　記事例：ファカルティの仕事の進化
（4）将来のティーチングとラーニング（Tomorrow's Teaching and Learning）
　記事例：ラーニングスタイル
（5）将来の研究（Tomorrow’s Research）
　記事例：研究助成金をティーチングの評価に結びつけるには

これらのテーマの中で最も人気が高いのは（4）将来のティーチングとラーニングであり，次点が（3）将来のアカデミックキャリアである．

2．2．メカニズム

メーリングリストで送られるニュースレターの内容の大部分は，本や雑誌の引用であり，その引用部分は高等教育の約50の出版社から無料で提供される．なお，引用方法や引用部分は編集者であるReis教授が決定する．また，メーリングリストに投稿できるのは編集者のみである．重要な点として，読者のeメールアドレスは他機関に流出しないように注意深く守られる．

編集者は，週に4時間から5時間をかけて記事の選択・準備，そして読者の問い合わせへの回答を行う．また，パートタイムの雇用者が一名おり，週平均5時間の仕事をする．その仕事内容はメーリングリストのウェブサイトと読者リストの維持管理と統計の収集，そして，記事の入力である．コストは年間約2万ドルだが，これを記事の数と読者数で割ると，1人・1記事当たり1セントとなる．

2．3．読者

1998年の開設時は，約500名の学術関係者から始まった．読者は主に学術関係者であり，Reis教授の著書*Tomorrow's Professor*[3]を通して獲得した．読者の増加は主に教員同士のメールを通した口コミであり，具体的な方法は，メーリングリストの記事内容を仲間に再びメールで送ることであった．また，時として高等教育の学術会議のメーリングリストに，紹介されることもあった．

2004年6月現在のメーリングリスト読者は約2万人であり，それは世界中106国600以上の学術機関から構成されている．読者の学科は工学から教育まで，全領域に及んでいる．また，読者層も大学内は大学院生，ポスドクから教授，理事・経営者まで全領域に及び，さらには大学外では高等教育に興味を持つ政府や企業関係者もいる．そのうち最も多いのは助手（Assistant Professor）で，全読者の24%を占め，次点は教授（20%），そして大学院生（18%）と続く．

2. 4. 影響力と人気の理由

読者数が二万人ということで，量的な影響力があることに加え，年間500人以上の読者からコメントを受けとる．読者アンケートの示唆により，”Tomorrow's Professor Mailing List” の価値と人気の理由は以下の7項目に分類される．

1. ウェブにわざわざ見に行かなくとも，自動で届けられる
2. 個々のレターは短く（1000-1500単語），それ自身で完結している
3. レターは週に2回，年に100回に限られている
4. レターは興味深く，実際的なものを含み，刺激的なこともある
5. フォローアップのためのウェブサイトが紹介され，さらなる情報を得ることができる
6. メーリングリストのウェブサイトは，カテゴリー分けされ，全ての記事を読むことができる
7. 読者は彼らの同僚の間であまり知られていない情報も得ることができる

2. 5. Tomorrow's Professor Mailing List のまとめ

第2章では，Tomorrow's Professor Mailing List を紹介してきた．本節では，第2章のまとめとして，Tomorrow's Professor Mailing List の概要を表1に，その特長を表2にそれぞれ示す．

次章では，我々が運営する教育改善支援のためのメーリングリストを紹介する．

3. メーリングリストによる教育支援の実践

我々は後述するプロジェクト内で，教育改善支援のメーリングリスト「プロジェクト通信」を運営，管理している．「プロジェクト通信」の基本編集方針は，**読者のニーズに応える**ということであり，メーリングリストの目的，内容，構成全てが，この方針に従って決定されている．**相手の求めるものを与える**ということは，米国の教育改善支援の活動では半ば常識化しており，「プロジェクト通信」の基本方針は，これと合致している．

本章ではまず，「プロジェクト通信」の背景として，我々が参加している「国際連携を活かした高等教育システムの構築プロジェクト」[4]（以下，「国際連携プロジェクト」）の概要を紹介する．そして，「プロジェクト通信」の読者，すなわちプロジェクト関係者のニーズを分析する．その後，「プロジェクト通信」の概要とメカニズムを述べる．さらに，読者への配慮事項を列挙し，実際に「プロジェクト通信」で配信されたメールを，一例として引用するとともに，そこでは読者への配慮がどのように具体的に反映されているのかを解説する．

表 1　Tomorrow's Professor Mailing List の概要

項　目	内　　容
目　　的	・刺激的かつ実用的な高等教育の問題に対する資料・題材の提供 ・アカデミックキャリア成功のための見識の提供
編集方法	・高等教育の本または雑誌からの引用
コ ス ト	・教員：編集・フィードバック応答に週4～5時間 ・アルバイト：システム管理，統計収集，記事入力に週5時間
読　　者	・学術機関は大学院生から理事まで．政府，私企業の読者も存在 ・誰でも簡単にメーリングリストに登録可能 ・読者数約2万人．世界106カ国
配信形態	・週2回 ・編集者のみが投稿可能

表2　Tomorrow's Professor Mailing List の特長

項　目	内　　容
メディア	・メール自体の特長として，読者に自動的に配信 ・短く（1000-1500単語），記事それ自体で完結 ・週2回，年100回に限定
内　　容	・興味深く実際的で，刺激的 ・稀少な情報
読者のフォロー	・ウェブサイトの紹介により情報を補足 ・過去の記事がカテゴリー分けされて全て読めるウェブサイトが存在

3. 1.「プロジェクト通信」成立の背景

「プロジェクト通信」は「国際連携プロジェクト」の内部で営まれているメーリングリストである．本節では，「国際連携プロジェクト」の概要の紹介と，「プロジェクト通信」の読者である，プロジェクト関係者のニーズ分析を行う．

3. 1. 1 「国際連携プロジェクト」

「国際連携プロジェクト」は，平成17年度より3年計画の文部科学省特別教育研究経費として採択され，高等教育開発推進センター，教育学研究科，教育情報学研究部ISTU（東北大学インターネットスクール）支援室ならびに各学部・研究科との連携により，東北大学における研究大学にふさわしい教育の改善と学生支援システム創出に向けた新たな高等教育システムの構築に取り組むものである．その目的遂行のために，米国スタンフォード大学と協力関係を結び，研究者2名の派遣と学内外関係者数十名の研修を行う．

我々は2名とも米国派遣員で，平成17年9月からスタンフォード大学の客員助教授（中島），客員研究員（渡利）として活動を行っている．プロジェクトの主な活動としては，様々なFDのテーマ別に日本で行われる研修をはじめとして，平成18年3月には，12名の学内外関係者がスタンフォード大学を訪れ，海外研修を受講する予定である．海外研修ではFDワークショップがあり，受講者は日本とは異なる構成，進行のワークショップに参加することになる．

3. 1. 2 「プロジェクト通信」の読者

プロジェクト通信の読者は本稿執筆時点で44名であり，大きく分けて，以下の3種類に分類される．

1. FDの推進者（大学理事，部局長，教務委員長など）
2. 授業改善の意欲ある教員（教授，助教授）
3. プロジェクト関連事務員

彼らが必要とする情報はどのようなものであろうか？

まず，FDの推進者が必要とする情報としては，どのようにFDのための組織を作り，FDを計画し，実施するかが挙げられるだろう．例えば，スタンフォードのFDセンターである，Center for Teaching Learningの設立と歴史，発展の理由などは，FDの推進者，特に大学上層部の読者にとって有益な情報となろう．

次に，授業改善の意欲ある教員が求めるものは，実際に授業で使え，授業改善の効果が実感できる情報であろう．例えば，学生を授業に積極的に参加させるための効果的な質問の仕方などである．また，海外研修に参加する教員にとっては，例えば日本のFDワークショップとの違いなど，海外研修の内容に関する情報も必要となる．

最後にプロジェクト関係事務員であるが，彼らが必要な情報としては，プロジェクトの各活動日程や進行状況の情報共有が挙げられよう．具体的には，テーマ別研修の参加者募集日程や計画がそれに該当する．

「プロジェクト通信の読者」が必要とする情報の分析は以上であるが，「プロジェクト通信」は，情報提供と共有以外にもう一つの大切な役割がある．それは，関係者間のコミュニケーションである．「プロジェクト通信」の読者は，全員日本の東北地方に在住であり，我々はほぼ全員と会ったことがある．ところが，関係者の所属部局や所属大学が多岐にわたっているために，関係者たちは互いに簡単には顔を合わせることができない．プロジェクトを成功させるためには，関係者のモチベーションが高いことが必要であり，このことから，「プロジェクト通信」では，コミュニケーションの側面も重要視する必要がある．

3. 2.「プロジェクト通信」の目的と概要

前節で述べた背景のもと，我々二名の海外派遣者と，日本在住のプロジェクト関係者の間には，以下の解決すべき課題があった．

1. 遠隔地間でのコミュニケーション
2. 教育改善への継続的なコミットメント
3. 海外で学んだ新しい教育改善支援の知識提供

それぞれについて，簡単に補足する．まず，コミュニケーションとコミットメントに関して説明する．「国際連携プロジェクト」の最重要イベントとして，平成18年と平成19年の3月にスタンフォード大学で行われる海外研修がある．よって，その時点でプロジェクト関係者間で海外研修に必要な事前知識の共有と，教育改善への高いコミットメントが望まれる．しかし，プロジェクトメンバーが一堂に会したのは，平成17年の9月であり，しかも，その一度のみである．その後2，3ヶ月に一回，テーマ別研修があるが，メンバーの全体が集まるわけではなく，それ以外はお互いにほとんど全く顔を合わせる機会が無いという背景がある．次に教育改善支援の知識提供に関して説明する．我々海外派遣者の使命の一つとして，アメリカの教育改善支援活動を調査，研究し，それを日本に報告

するというものがある．例えば結果を年に2回まとめて報告することも可能であるが，我々が学ぶ知識には，日本でもすぐに実践可能であり，また効果を期待できるものも多い．そこで，それらの知識をコンパクトにまとめて頻繁に報告し，プロジェクト関係者間で共有することは有益であろう．さらに，前述したように，海外研修時までに日米のFD研修の格差を埋めるためにも，それらに関連する情報の提供が必要となる．

我々はメーリングリスト「プロジェクト通信」によって，毎週ニュースレターをプロジェクト関係者に配信することで，以上の課題に対処することを決定した．このことから「プロジェクト通信」の目的として，以下の二つを設定した．

1. 海外派遣者が学んだ教育支援に関する情報のうち，特にプロジェクト関係者が必要とするものの提供
2. 海外派遣者と日本のプロジェクト関係者とのコミュニケーションによる，プロジェクトへのコミットメントの強化

そして，以上の目的を達成するために，「プロジェクト通信」では前節で述べた読者層の分析をもとにして以下の4つのテーマを定めた．

(1) プロジェクト関連のお知らせ
(2) 授業のヒント
(3) FDの普及戦略
(4) FDのリソース

「プロジェクト通信」の記事は主にこの4テーマに従って構成される．

3. 3. メカニズム

ニュースレターのうち「プロジェクト関連のお知らせ」以外の内容は，我々がスタンフォード大学のFDワークショップに参加して学んだものや，本などで学習したものである．それらの内容は，配信1ヶ月前から構想され，それに向けて我々が補足知識の収集やワークショップのまとめを行うというサイクルが出来ている．

表3に2006年1月20日までに配信された「プロジェクト通信」の内容を，表4にこれから配信される2006年3月までの内容の構想をそれぞれ示す．特に「授業

表3　これまでに配信した「プロジェクト通信」の内容

号数	1	2	3	4	5	6	7
担当者	渡利（W）	中島（T）	渡利	中島	渡利	中島	渡利
送信予定日	11-26-05	11-30-05	2012/7/5	12-14-05	12-21-05	2001/11/6	1-18-06
プロジェクトのお知らせ	紹介		海外研修①/授業相互参観研（12-21-05）	海外研修②	海外研修③／第2回テーマ別研修（1-31-06）	テーマ別研修「ウェブを使った相互参加型学習」	海外研修の参加者決定
授業のヒント（useful tips）		効果的な質問の仕方（T）	セメスター中期の授業評価（T）	授業映像の効果的な自己点検方法～基礎編～（T）	授業映像の効果的な自己点検方法～発展編～（T）	学生に効果的な試験勉強をさせる方法（W）	学生にいいレポートを書かせる方法（W）
FDの普及戦略		CTLの概要（W）	FD研修の参加者を集めるためには（W）	Teaching Centersの設立と発展の理由（W）	効果的なワークショップを企画するには（W）		
FDのリソース		Teaching at Stanford	バークレーの本・ウェブサイト	名古屋大学チップス先生（W）	IDEA	Promoting Active Learning（T）	レポートの書き方の本・ウェブサイト（W）
その他						〈海外研修特集1〉アクティブラーナーとなる（T）	〈海外研修特集1〉アクティブラーニング2（T）

のヒント」では，大学の授業の進度や，プロジェクトの研修スケジュールに合わせたトピックが選ばれている．例えば表3の「授業のヒント」の欄を見ると，セメスター中盤では，「中期授業評価」，後半では「効果的な試験勉強をさせる方法」，「いいレポートを書かせる方法」が計画されている．また，表4からわかるように，1月以降は，3月上旬の海外研修に合わせて，研修内容を説明したり（「授業のヒント」のCourse Design①〜⑤），日本と米国の研修のギャップを埋めるような内容（例えば〈海外研修特集2〉）が企画されている．また，FDのリソースは，参考文献やウェブサイトの紹介であるが，それも，多くの場合〈FDの普及戦略〉や〈授業のヒント〉の内容を補足するものとなっている．

現在メーリングリストは我々により手動で登録されており，プロジェクト内で情報を共有したい人は誰でも投稿することができる．

ニュースレターは週一回木曜日に発行されるが，我々は毎週に合計約20時間をかけて，記事を準備，タイプ，サポートウェブサイトの更新，また読者からのフィードバックに対しての返信を行う．現在のところ，記事の作成にかかる時間的コストは，かなり大きい．「プロジェクト通信」は，我々の学習成果の整理・補足・報告も兼ねているので，このコストを受け入れている．しかしながら，将来的にFDのためのメーリングリストを運営する場合には，他大学などとリソースを共有することなどにより，作成コストを下げることが望まれる．

3. 4.「プロジェクト通信」作成時における読者への配慮

本節では，我々が記事の作成にあたって具体的に配慮している点を情報提供とコミュニケーションの側面から，それぞれ表5と表6にまとめる．その後，実際に配信した「プロジェクト通信」の典型的な例として，2005年12月14日に実際に配信された第4号の全文を引用し，読者への配慮が具体的にどのように行われているのかを解説する．

以下は，「プロジェクト通信」第4号の引用であり（ただし，読者への配慮に無関係な部分は省略してある），文の横に囲み文字で解説を加えてある．この囲み文字は，表5と表6の各項目が対応している．

表4　これから配信予定の「プロジェクト通信」の構想

号数	8	9	10	11	12	13
担当者	中島（T）	渡利（W）	中島	渡利	中島	渡利
送信予定日	1-25-06	2002/1/6	2002/8/6	2-15-06	2-22-06	2003/1/6
プロジェクトのお知らせ	海外研修の詳細な日程発表（T）	未定（W）	未定（T）	未定（W）	未定（T）	未定（W）
授業のヒント（useful tips）	レポートの採点方法（W）	Course design① 7 principles（T）	Course Design② Designing Courses Backwards（T）	Course Design③ Active Learning（T）	Course Design④ Using Technogogies（T）	Course Design⑤ Feedback and Assessment（W）
FDの普及戦略	CTL Organization（T）	CTL Staff（T）	FDの定義（W）	名古屋大学 特色GP（W）	京都大学 特色GP（W）	
FDのリソース	評価の仕方の本・ウェブサイト（W）	7 principles 関連書籍・ウェブサイト（T）	（T）	特色GPウェブサイト（W）	（T）	〈海外研修のリソース〉スタンフォード大学ウェブサイト，周辺の施設（T）
その他						〈海外研修特集2〉スタンフォード大学の教育プログラム（W）

表5 「プロジェクト通信」読者への配慮事項（情報提供）

項　目	内　　容
メディア	・短く（5分以内で読める．約3000字），記事それ自体で完結 ・週1回木曜日，昼までに配信．昼休みに読了可能 ・読み易いレイアウト：30字で改行，空行の利用，目次，トピックを〈〉で囲む，トピックの区切り線
内　　容	・読者の興味に合わせたトピック：〈授業のヒント〉〈FDの普及戦略〉 ・学期中のイベントに合わせた時事的なトピック ・実用的で具体的かつ明確．読者がすぐに試せて効果が確認可能 ・日本においては稀少な情報
読者のフォロー	・トピックを補足する，ウェブサイト等紹介：＜FDのリソース＞ ・過去の記事がトピックごとに分けられて全て読めるウェブサイト

表6 「プロジェクト通信」読者への配慮事項（コミュニケーション）

項　目	内　　容
フィードバック	読者のフィードバックを呼びかけ，各フィードバックに応答
一体感	読者にとって身近で関係の深い日常の話題提供
親しみ易さ	我々の個人的経験を交えた話題提供

「プロジェクト通信」第4号

プロジェクト関係者の皆様
こんにちは．プロジェクト通信 第4号担当の中島です．
みなさま，年末に向かって大変にお忙しい日々を　← 一体感
お過ごしのことと思います．　（大学教員は年末はたいてい忙しい）

こちらパロアルトでは風邪が流行っているようで，
周りでも咳をしている人をちらほらと見かけます．　← 親しみ易さ
季節の変わり目に風邪をひきやすいのは，　← 一体感
万国共通なのかもしれません．

どうか，皆様も体にお気をつけてお過ごしください．

← レイアウト：空行の利用

さて，第4回目の「プロジェクト通信」は以下の内容で
お送りします．特に，〈海外研修のお知らせ2〉には，
3月に行われる海外研修のスケジュールと参加申込み方法が
掲載されておりますので，関係者の方は前回に引き続き
必ずご確認ください．

目次　← レイアウト：目次
〈海外研修のお知らせ2〉：スケジュール・参加申し込み方法
〈授業のヒント〉：「授業映像の効果的な自己点検方法1」
〈FDの普及戦略〉：「Teaching Centersの設立と発展の理由」
〈FDのリソース〉：「成長するチップス先生」

〈後記〉

――――――

どの点を変更するだろうか？(3つ挙げてみる)
6）それらの3つの点をどのように変更するだろうか？

以上，忙しく，十分な時間が取れない先生のための
授業自己点検のヒントでした.

来週は，もっと詳細に自分の授業を分析してみたい先生のために
「授業映像の効果的な自己点検方法2」をお送りする予定です.

――

〈FDの普及戦略〉

「Teaching Centersの設立と発展の理由」　← 内容：Teaching Centerの立ち上げを考える人にアピール

これまでの「プロジェクト通信」では，CTLのサービス一覧と
ワークショップを例に，FDの普及戦略を幾つか指摘しました.
今回は，CTLがスタンフォード大学に設立された経緯を中心に,
「Teaching Centersの設立と発展の理由」について
説明したいと思います.

Teaching Centerの設立と発展に必要なものは大きく2つあります.
1）資金　← 内容：明確
2）教育改善に関する情報という資源

スタンフォードにCTLが設立されたのは1975年ですが,
その目的は主に「2）教育改善に関する情報という資源」
を蓄積することにありました.

CTLはスタンフォード自身の資金ではなく,
ダンフォース基金という私的な財団からの寄付金によって
設立されました．その寄付の目的は，以下の2点でした.

①サンフランシスコ近辺の大学の教育改善のための資源を集める事
②スタンフォード大学における新任教員とTAのためのサポートをする事

同財団は，スタンフォード大学の他にハーバード大学他,
計5校に寄付をしましたが，ダンフォース財団の寄付が終了した
1978年以後にも学内の資金でTeaching Centerを維持できたのは,
スタンフォード大学とハーバード大学だけでした.

その他のteaching centersが多く設立されるようになったのは，
National Teaching & Learning Forumが1991年に
活動を開始してからです．このフォーラムは，
「2）教育改善に関する情報という資源」を全米の大学に提供しました．
その事によって，資源を持たない多くの大学がTeaching Centerを
設立することが可能になりました．

その他，POD Network（Professional and Organizational Development
in Higher Education）も教育改善のための情報交換の場を
提供するだけではなく，新しくTeaching Centerを設立する大学を
資金・資源の両面から支援しています．

私がこのような歴史を調べて思った事は，「意外と歴史が浅い」 ← 親しみ易さ
ということです．大学の大半は，90年代から取り組み始めた
ばかりですし，スタンフォードのCTLも老舗をいえども20年です．
しかし，アメリカの事例で素晴らしいと思うのは，
大学同士のネットワークを構築した点です．その事が短期間で ← 内容：希少
全米にFDを普及・発展させた理由ではないでしょうか．

次回は，FDの普及に貢献しているPODについて紹介したいと思います．
以上，渡利が担当しました．

――

〈FDリソース〉 ← 読者のフォロー
今回，紹介しますのは名古屋大学　高等教育研究センターの
ウェブサイト，「成長するチップス先生」です．
（http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/）

サイトには，1年を通しての授業の流れの概説，
授業の基本（大学教授法），授業で使う情報サイト一覧，
授業改善を希望する時や困った時のためのサポート体制等について
詳しく書かれています．
（中略）

――

〈後記〉

お忙しい中，最後までお読みくださり，ありがとうございます．

今回の「プロジェクト通信」はいかがでしたか． ← フィードバック
12月21日の授業相互参観研修を控え，今回は授業映像の自己点検

のヒントを中心にお送りしました.

ご意見・ご感想の連絡先は watanatu@stanford.edu です.　← フィードバック
もし，プロジェクト関係者の皆様とも共有したい
とお考えでしたら，project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp
までメールをお送りください.

東北地方は雪が積もっているそうですね．仕事が忙しく，帰りが
遅くなることも多いかと存じます．どうか，交通にはお気をつけ　← 一体感
ください.
それでは，これからもよろしくお願いいたします.

文責：中島 平

4. 考察

本章では,「Tomorrow's Professor Mailing List」と「プロジェクト通信」のメーリングリストの機能と特徴を比較しつつ，両者に共通する特性を明らかにする．表7に両メーリングリストの概要をまとめた．まず，目に留まるのは「Tomorrow's Professor Mailing List」の記事作成コストの低さである．ニュースレター1回当たりにかかる時間コストは「プロジェクト通信」の約1/4である．週に2回の配信で，実運営時間が5時間以下で済む理由は，編集者が本や雑誌から記事を選択しているためと考えられる．これが可能なのは，米国のFDリソースの豊富さに負うところが大きいだろう．しかし，日本で同様の方法を選択しようとする場合，現状ではリソースの少なさで実現は困難であると思われる．今後，大学間でFDのリソースを共有するなど，利用できるリソースを増やすことが望まれる.

両メーリングリストの目標で大きく異なるのは，「プロジェクト通信」が情報提供だけではなく，メンバー間のコミュニケーションも目的としている点である．このことは，「プロジェクト通信」メーリングリストが，メンバー全員投稿可能というポリシーにも表れている.

次に，両メーリングリストの類似点を分析する．我々が初めて「Tomorrow's Professor Mailing List」を知ったのは，「プロジェクト通信」第5号の配信後である．であるから，第3章で述べた配慮事項は「読者の必要

表7　各メーリングリストの概要

項　目	プロジェクト通信	Tomorrow's Professor
目　　的	米国の教育改善の知識提供	高等教育の問題に対する資料提供
	メンバー間コミュニケーション	アカデミックキャリア全般の見識提供
記事収集	海外派遣員の学習内容の報告	高等教育の本または雑誌からの引用
コ ス ト	実運営に2教員が計20時間/週	実運営に1教員が4 〜 5時間/週
	メンテナンスに1教員が1時間/週	メンテナンスに1アルバイトが5時間/週
読　　者	助手から理事まで．学生はいない	大学院生から理事まで.
	現状はプロジェクト関係者のみ	誰でも簡単に登録可能
	読者44人	読者数約2万人．世界106カ国
配信形態	週1回木曜日午前中	週2回
	メンバーは全員投稿可能	編集者のみが投稿可能

表8　各メーリングリストの特性比較

項　目	内　　容	プロジェクト通信	Tomorrow's Professor
メディア	短く，記事それ自体で完結	○（3000文字，5分）	○（1000-1500単語）
	配信数限定	△（週１回），メンバーは投稿可	○（週2回），編集者のみ投稿可
	読み易いレイアウトの工夫	○	○
内容	読者の興味に合致	○	○
	時事的なトピック	○	△
	実用的で具体的かつ明確	○	○
	稀少な情報	○	○
読者フォロー	記事の補足	○（Webや本の紹介）	○（Webの紹介）
	過去記事参照	○（Webサイトあり）	○（Webサイトあり）

とするものを提供する」という視点から出発し，全く独立に考え出された．それにもかかわらず，

表2「Tomorrow's Professor Mailing List」の特長と表5「プロジェクト通信」の読者への配慮事項（情報提供）とを比較すると，その類似性は非常に高い．その類似性を確認するために，表2と表5から項目を取り出して比較した表8を示す．

表8においては二項目だけ，両者に違いがある．まず，「プロジェクト通信」では，編集者以外も投稿可能である．これは，メーリングリストに読者の望まないメールが紛れ込む危険性を増やす．しかしながら，「プロジェクト通信」では，プロジェクト関係者間のコミュニケーションも重視しているため，関係者のメーリングリストへの投稿は歓迎すべきものである．ただし，メーリングリストのメンバーはプロジェクト関係者のみとなっており，また，メンバー数も50人以下と少ないので，幸いこの点は問題となっていない．一方「Tomorrow's Professor Mailing List」では，時事的なトピックを積極的には扱っていないが，これは読者層が106カ国にも及ぶことで，読者のアカデミックスケジュールが揃わないためであろう．

以上で説明した，メーリングリストの読者層が異なるために生じた相違点2項目以外は，全ての項目で，両メーリングリストは一致している．両メーリングリストの目標や成立経緯，読者数が異なるのに，望ましいとされる特徴がほぼ同じであることは，興味深い．この理由としては，両メーリングリストが主に大学教員を対象とし，大学教員のニーズを満たすように設計されたためであろう．

5. 結論

本稿では，新しく，より気軽にできるFDの一つとしてメーリングリストを利用した教育改善の支援を紹介，分析してきた．以下，FDの推進者がそのようなメーリングリストを運営する場合の提言を行い，その提言を基に設計・運営されたFDメーリングリストが読者である教員にもたらすメリットを挙げる．

FDの推進者が，良いFDメーリングリストを運営するためには，以下の項目を考慮すべきである．

1. まず大前提として，読者のニーズに応えた記事を提供すること．
2. 短く，分かり易く，自己完結した記事を提供すること．
3. 記事の短さを更なる情報を紹介することでカバーすること．
4. 読み易いレイアウトを心がけること．
5. Webなど容易に過去記事を検索できるようにして，読者をフォローアップすること．
6. メーリングリストの流量が多くなりすぎないように，情報の質が下がらないように配慮すること．

以下に，メーリングリストの記事の作成にかかる時間コストに関して注意点を述べる．日本でFDメーリングリストを運営しようとした場合，利用可能なFDリソースの不足から，自分で記事を一から作らなければならなくなる可能性がある．その場合，運営にかかる時間コストは，リソースを紹介する場合と比較して，4倍以上になる（我々の実践の場合，週20時間）．このことは，FDの推進者にとって無視できない問題であり，日本でも利用可能なFDリソースが増えることが望まれる．以上より，日本でFDのリソースが豊

富に揃うまでは，高等教育の研究者，特に教育改善支援の研究者が，自らの研究の一環としてFDメーリングリストの記事を作成することが得策であろう．また，それらのリソースを研究者間・大学間で共有できるようにすることは，長い目で見れば日本の教育改善支援活動の普及に大きな進歩をもたらす．

適切に設計・運営されたFDメーリングリストにより，読者である教員に以下のような恩恵を得る．

1. 教育改善に役に立つ情報がメールで目の前のパソコンに届く．
2. そのメールは週に数回，決まった頻度で届く．
3. そのメールは読み易く，自己完結しており，5分程度で読める．
4. さらに詳しい情報を知りたい場合，そのメールの参照先に当たればよい．
5. 過去のメールが読みたくなったときには，メーリングリストのウェブサイトに行けば，簡単に検索できる．

FDの受講者にとってメーリングリストを活用したFDの最大の強みは，適切に設計・運用されたFDメーリングリストに所属することによる，メリットはあっても，デメリットがほとんど無いという点であろう．

FDの推進者は是非，新しい教育改善の支援活動の一つとして，メーリングリストを活用することを選択肢の一つとして検討していただきたい．

引用文献

1）Tomorrow's Professor Mailing List:
（http://ctl.stanford.edu/Tomprof/index.shtml）

2）Tomorrow's Professor Listserv Update:
（http://ctl.stanford.edu/Tomprof/postings/576.html）

3）Richard M. Reis. Tomorrow's Professor-Preparing For Academic Careers in Science and Engineering-. New Jersey. IEEE PRESS. 1997.

4）国際連携を活かした高等教育システムの構築プロジェクト：
（http://www.istu.jp/iproject/index.htm）